

チャラカ・サンヒターにおける人間観と医者観 —ブラフマーストラバーシュヤのバラモン観及びプラシャスタ パーダバーシュヤに見られる人間観との比較考察—

長友泰潤

哲学研究室

2012年10月11日受付; 2013年1月29日受理

The theory of the good life and the ideal doctor in Carakasamhitā:
Compared with the description of the exemplary brahmana(priest) of
the Brahmasūtrabhāṣya and the Praśastapādabhāṣya

Taijun Nagatomo

Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 11, 2012; Accepted January 29, 2013

In the description of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā, those who are not afflicted with physical and mental ailments, who are endowed with youth, enthusiasm, strength, reputation, manliness, boldness, knowledge of arts and sciences, senses, objects of senses, ability of the sense organs, riches and various luxurious articles for enjoyment, who achieve whatever they want and move as they like, lead a happy life; others lead an unhappy life. Those who are the well-wishers of all creatures, who are truthful, peace loving, who examine things before acting upon them, who are vigilant, who serve the elders, who have full control over passion, anger, envy, pride and prestige, who are constantly given to various types of charity, meditation, acquisition of knowledge and quite life, who have full knowledge of the spiritual power and are devoted to it, lead a useful life, others do not. And one should serve the good doctor who are full of tranquility and have the knowledge of arts and sciences of the profession.

In the description of the exemplary brāhmana(priest) of the Brahmasūtrabhāṣya and the Praśastapādabhāṣya, those who have the knowledge of Veda, obey the law and the teachings of the scripture leave the falsehood and the arrogance are the good brahmana.

According to the above investigation, it can be maintained that there is a similarity between the view of the good life and the good doctor of the Carakasamhitā and the exemplary brāhmana(priest) of the Brahmasūtrabhāṣya and the Praśastapādabhāṣya.

Key words: Carakasamhitā, the ideal doctor, Brahmasūtrabhāṣya, the good life.

序 論

医学論書であるチャラカ・サンヒター（以下CS）には、幸福な人生とは何か、有益な人生とは何かといった人間についての考察が見られる。また、医学論書であるため、医者のある方、良い医者と悪い医者についての言及も見られる。ここでは、まず、CSに見られる人間観、医者観について、詳細に検討していく。そ

して、このCSに見られる人間観を宗教哲学論書であるブラフマーストラバーシュヤ（以下SBh）のバラモン観、そして、プラシャスタパーダバーシュヤ（PB）に見られる人間観と比較考察する。

1. チャラカ・サンヒターの人間観と医者観

1) 幸福、有益な人生

まず、CSでは次のように述べられている。

「ヴェーダ」について語ったので、[次に]「アー

ユス]について述べよう。ここで、「アーユス」は、「精神作用の連続」や「生命」、「アヌバンダ（結合したもの）」、「保持するもの」と同一の意味である。」

vedem copadiśyāyurvācyam, tatrāyaś –
cetanāunvṛttirjīvitamanubandho dhāri
cetyeko' rthah //22//^{注1)}

ここでは、ヴェーダの説明に続いて、アーユス、すなわち、精神作用の連続や生命、アヌバンダ（結合したもの）、保持するものを意味するものについて語られるとされる。

さらに、CS では次のように述べられている。

「このアーユスを「知らしめる」から「アーユルヴェーダ」[と言われる]。どんなふうに[知らしめるのか]。[これに答えて次のように]言われている。それ（アーユス）の本来の特徴に基づいて、また幸福[な人生]と不幸[な人生]に基づいて、また、有益[な人生]と無益[な人生]に基づいて、また予測し得る寿命の長さや予測し得ない寿命の長さに基づいて[知らしめる]。また、ものとその働きに、長寿に役立つものとそうでないものを「知らしめる」から「アーユルヴェーダ」[と言われる]。ここで長寿に役立つ、あるいは役立たないものとその働きは、[アーユルヴェーダの]体系全体によって教えられるであろう。」(23)

tadāyurvedayatītyāyurvedah ; kathamiti
cet? ucyate – svalakṣaṇataḥ sukhāsukhato
hitāhitataḥ pramāṇāpramāṇātaśca; yataś –
cāyusyaṅyanāyusyaṅni ca dravyaguṇa –
karmāṇi vedayatyato 'pyāyurvedah /
tatrāyusyaṅyanāsyuyāni ca dravyaguṇa –
karmāṇi kevalenopadekṣyante tantreṇa //23//^{注2)}

ここでは、アーユルヴェーダが、アーユスをその本来の特徴に基づいて、また幸福な人生と不幸な人生に、そして有益な人生と無益な人生に基づいて、また予測し得る寿命の長さや予測し得ない寿命の長さに基づいて知らしめるとされる。また、長寿に役立つ、あるいは役立たないものとその働きは、アーユルヴェーダの体系全体によって教えられるであろうと言われる。

さらに、CS では次のように述べられている。

「そのうち「本来の特徴に基づいて」生命は本章と第一章においてしかるべく述べられた。また「幸福な人生」は、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人—このような人にあるといわれる。これらとは反対の人々には「不幸な人生」がある。」

tatrāyuruktam svalakṣaṇato yathāvad
ihaiva pūrvādhyāye ca /
tatra śarīramānasābhyām
rogābhyāmanabhidrutasya viśeṣeṇa
yauvanavataḥ samarthānugatabala –

vīryayaśahpauruṣaparākramasya
jñānavijñānendriyendriyārthabala –
samudaye vartamānasya paramarddhirucira –
vividhopabhogasya samṛddhasarvārambhasya
yatheṣṭavicāriṇaḥ sukhāmāyurusyate ;
asukhamato viparyeṇa ;^{注3)}

ここで、幸福な人生は、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人、このような人にあるといわれる。これらとは反対の人々には不幸な人生があるとされる。

また、CS では次のように述べられている。

「[有益な人生]は、[あらゆる]生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、[義務（ダルマ）、財（アルタ）、愛（カーマ）からなる]人生の三目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我（アディアートマン）を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人、これらの人にあると言われる。これらの反対の[人々の人生は]「無益」である。」(24)

hitaśiṅṇaḥ punarbhūtānām parasvādupara –
tasya satyavādinaḥ śamaparasya parīkṣya –
kāriṇo' paramattasya trivargaṃ
parasparenānupahatamupasevamānasya
pūjārhasampūjakasya jñānavijñāna –
upaśamaśīlasya vṛddhopasevinaḥ
suniyatarāgaroṣeṣyāmadamānavegasya
satatam vividhpradānaparasya
tapojñānapraśamanityasyādhyātmaavidas –
tatparasya lokamimam cāmum ca –
avekṣamānasya smṛtimatimito hitamāyur
ucyate; ahitamato viparyeṇa //24//^{注4)}

ここで、有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務（ダルマ）、財（アルタ）、愛（カーマ）からなる人生の三目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我（アディアートマン）を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人にあると言われる。これらの反対の人々の人生は無益であるとされる。

さらに、CS では次のように述べられている。

「それ（アーユルヴェーダ）はバラモンとクシャトリアとヴァイシャによって学ばれるべきものである。」

sa cādhyetavyo brāhmaṇarājanyavaiśyāih; ^{注5)}

ここで、アーユルヴェーダは、バラモン（僧侶）、クシャトリア（王族）、ヴァイシャ（庶民）が学ぶものとされている。

さらに、CS では次のように述べられている。

「このうち、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また全般に、[上位三カーストの]すべての人は義務（ダルマ）と財（アルタ）と愛（カーマ）を確保するために[アーユルヴェーダを学ぶべきである]。それらのうち、最高我（アディアートマン）を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々、あるいは父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処すること、これが彼[アーユルヴェーダ実践者]の最高の義務である。」

tatrānugrahārtham prāṇinām brāhmaṇaiḥ,
āraṅgārtham rājanyaiḥ, vṛtṭyartham
vaiśyāih; sāmānyato vā dharmārthakāma –
parigrahārtham sarvaiḥ/ tatra
yadadyātmaavidām dharmapathasthānām
vā mātrpitṛbhrātṛbandhugurujanasya vā
dharmaprakāśakānām
vikārapraśamane prayatnavān bhavati,
yaccāyurvedoktamadyātmanudhyāyati
vedayatyanuvīdhīyate vā, so' sya paro
dharmah; ^{注6)}

ここで、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務（ダルマ）と財（アルタ）と愛（カーマ）を確保するためにアーユルヴェーダを学ぶべきであるとされる。

また、これらの三カーストの人々のうち、最高我（アディアートマン）を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる。

また、CS では次のように述べられている。

「また、主君や長者からじきじきに[彼らの]健康を守ったという理由で財貨が与えられたり、自分を保護してもらえ、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやること、これが彼の財（アルタ）である。また、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うこと、これが彼の愛（カーマ）である。以上のように[八つの]質問にしたがって[答え

が] 余すところなく述べられた。」
yā punarīśvarānām vasumatām vā sakāśāt
sukhopahāranimittā bhavaty
arthāvāptirāraṅgaṇam ca, yā ca sva –
parigrhītānām prāṇināmāturādāraṅgā,
so' syārthaḥ; yat punarasya
vidvadgrahaṇayaśah śaraṇyatvam ca,
yā ca sammānaśuśrūṣā, yacceṣṭānām
viśayānāmārogyamādhatte so' sya kāmah /
iti yathāpraśnamuktamaśeṣeṇa //29// ^{注7)}

ここで、財（アルタ）とは、主君や長者からじきじきに、彼らの健康を守ったという理由で財貨を与えられたり、自分を保護してもらえ、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやることであり、愛（カーマ）とは、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うことであるとされる。

2) 医者のあるべき姿

また、CS では医者のある方について、次のように述べられている。

「邪悪な[医者]という災厄は大混乱を生ずるものであるが、それはちょうど[穀物などを食い荒らす]ウズラ[の大群]のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくる。」(72)

「したがって優劣を見分けるために、そのような連中に対して、いつでも前置きの会話において、八つの質問を投げかけるべきである。そうすると[真に]医学を知っているものの能力はその間において[発揮される] (73)。

santi pallavikotpātāḥ
samksobham janayanti ye /
vartakānāmivotpātāḥ
sahasāivāvibhāvitāḥ //72//
tasmāntān pūrvasamjalpe
sarvatṛṣṭakamādiṣet /
parāvaraparīkṣārtham tatra
śāstravidām balam //73// ^{注8)}

ここでは、邪悪な医者という災厄は大混乱を生ずるものであり、穀物などを食い荒らすウズラの大群のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくると述べられている。邪悪な医者に対しては、その優劣を見分けるために、前置きの会話において、八つの質問を投げかけるべきとされる。また、真に医学を知っているものの能力はその間においても発揮されると言う。

さらに、CS では邪悪な医者について、次のように述べられている。

「[医学の]体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが[弓の]「弦」の音を聞いただけで逃げ出すように、「タントラ」という言葉を聞いただけで逃げていく。」(74)

「[牛などの弱い]動物たちのなかで、ある動物は[仲間の連中が]弱いので狼のごとくふるまう

が、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわす。」(75)

śabdāmātreṇa tantrasya
kevalasyaikadeśikāḥ /
bhramantyalpabalāstantre
jyāśabdeneva vartakāḥ //74//
paśuḥ paśūnām daurbalyāt
kaścinmadhye vṛkāyate /
sa satyaṃ vṛkamāsādyā
prakṛtiṃ bhajate paśuḥ //75//^{注9)}

ここでは、未熟な医者の様子が語られている。すなわち、医学の体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが弓の弦の音を聞いただけで逃げ出すように、タントラという言葉の聞いただけで逃げていくと言われる。また、牛などの弱い動物たちのなかで、ある動物は仲間の連中が弱いので狼のごとくふるまうが、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわすと言われる。

さらに、CS では、無知な人について次のように述べられている。

「ちょうどそのように、無知な人々の中にいる時は、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人は、[真に] 信頼される人に会うとおじけづいてしまうのである。」(76)

「無知で学問のない男というものは、ちょうど[自分を大きく見せるために] 羊毛で身を覆った犬のようなものである。[このような] 素姓卑しい愚か者が[優れた医者との] 対話において何を言えるであろうか。」(77)

tadvadañño' jñamadyasthaḥ
kaścinmaukharyasādhanāḥ /
sthāpayatyāptamātmānāptam
tvāsādyā bhidyate //76//
babhrurgūḍha ivorṇābhir –
abuddhirabahuśrutāḥ /
kiṃ vai vakṣyati saṃjalpe
kuṇḍabhedī jaḍo yathā //77//^{注10)}

ここでは、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人は、真に信頼される人に会うとおじけづいてしまうとされる。また、無知で学問のない男というものは、ちょうど自分を大きく見せるために羊毛で身を覆った犬のようなものであり、優れた医者との対話においては何も言えなくなるとされる。

さらに、CS では、無知な人について次のように述べられている。

「[しかし] 無学であっても行いは[実践者としては] 優れている人々がいるが、そのような人を医者は議論で打ち負かしてはならない。その他の、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に[八つの質問]によってやっつけるべきである」(78)。

「無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほ

どに語るものである。」(79)

sadvṛttairna vigrhṇīyād
bhiṣagalpaśrutairapi /
hanyāt praśnāṣṭakenādāvitarāṃstv –
āptamāninaḥ //78//
dambhino mukharā hyajñāḥ
prabhūtābaddhabhāṣiṇaḥ /
prāyaḥ, prāyeṇa sumukhāḥ
santo yuktālpabhāṣiṇaḥ //79//^{注11)}

ここで、無学であっても行いは実践者としては優れている人々に対しては、医者は議論で打ち負かしてはならず、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に八つの質問によってやっつけるべきであるとされる。また、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほどに語るものであると言われる。

さらに、CS では、医者について次のように述べられている。

「[医者は] 医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのにおしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならない」(80)。「一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられる。」(81)

tattvajñānaprakāśārtham
ahaṅkāramanāśritaḥ /
svalpādhārājñamukharānmarṣayenna
vivādinaḥ //80//
paro bhūteṣvanukrośastattvajñāne
parā dayā /
yeṣāṃ teṣāmasadvādanigrahe
niratā matiḥ //81//^{注12)}

ここでは、医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのにおしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならないとされる。また、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられると言われる。

さらに、CS では、医者について次のように述べられている。

「誤った学説や[質問されると]「今は時機ではない」とか「身体具合が悪いので」と[逃げ口上を言うことや]、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟である。」(82)

「このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきである。冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきである。」(83)

asatpakṣāḥṣaṇitvārtidambhapāruṣya –
sādhanāḥ /
bhavantyanāptāḥ sve tantre
prāyaḥ paravikatthakāḥ //82//

tān kālapāśasadr̥śān varjayeccāstra –
dūṣakān /
praśamajñānavijñānapūrnāḥ
sevyā bhiṣaktamāḥ //83//^{註13)}

ここでは、誤った学説や質問されると今は時機ではないとか身体の具合が悪いのでと逃げ口上を言うことや、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟であるとされる。また、このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきであり、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであると言われる。

さらに、CS では、次のように述べられている。

「[精神と肉体の] 両者からなるあらゆる不幸は無知に基づいている。あらゆる幸福は汚れない知恵に基づいている。」(84)

samagraṃ duḥkhamāyattamavijñāne
dvayāśrayam /
sukhaṃ samagraṃ vijñāne
vimale ca pratiṣṭhitam //84//^{註14)}

ここでは、あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れない知恵に基づいていると言われる。

小 結

CS には、幸福な人生と不幸な人生に、そして有益な人生と無益な人生について言及がある。すなわち、幸福な人生とは、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人、このような人に存在するとされる。これらとは反対の人々には不幸な人生があるとされる。

次に、有益な人生について述べられる。この有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務、財、愛からなる人生の三つの目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人に存在するとされる。また、これらの反対の人々の人生は無益であるとされる。

また、それぞれのカーストの人々のあり方について述べられる。すなわち、パラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためにアーユルヴェエダを学ぶべきであるとされる。これらの三カ-

ーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェエダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェエダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる。続けて、財、愛について説明される。まず、財とは、主君や長者からじきじきに、彼らの健康を守ったという理由で財貨が与えられたり、自分を保護してもらえること、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやることであり、愛とは、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うことであるとされる。

さらに、CS では良い医者と悪い医者についての言及が見られる。まず、悪い医者については、邪悪な医者という災厄は大混乱を生ずるものであり、穀物などを食い荒らすウズラの大群のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくると述べられている。邪悪な医者に対しては、その優劣を見分けるために、前置きの会話において、八つの質問を投げかけるべきとされる。また、良い医者の能力、すなわち、真に医学を知っているものの能力はその間においても発揮されると言う。

さらに、悪い医者に入れられる未熟な医者の様子について述べられる。すなわち、医学の体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが弓の弦の音を聞いただけで逃げ出すように、タントラという言葉聞いただけで逃げていくと言われる。また、牛などの弱い動物たちのなかで、ある動物は仲間の連中が弱いので狼のごとくふるまうが、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわすと言われる。

また、悪い医者は、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人でもあるが、真に信頼される人に会うとおじけづいてしまうとされる。また、無知で学問のない医者というものは、ちょうど自分を大きく見せるために羊毛で身を覆った犬のようなものであり、優れた医者との対話においては何も言えなくなるとされる。また、無学であっても、実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならず、むしろ、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に八つの質問によってやっつけるべきであるとされる。また、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほどに語るものであると言われる。

さらに、良い医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのに、おしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならないとされる。また、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられると言われる。

医者の中で、誤った学説や質問されると今は時機で

はないとか身体の具合が悪いのでと逃げ口上を言うことや、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟であるとされる。また、このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきであり、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであると言われる。あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れない知恵に基づいていると言われる。

2. シャンカラ・パーシュヤのバラモン観

SBh においては、主として、バラモンのなすべき行為、そのあるべき人生、人間観についての言及がみられる。まず、それを見ていこう。

「ここで、『ブラフマンに安立する』というのは、実にブラフマンにおける完成、それ以外に関心事のないことを本性とする・それへの専心が言われる。そしてそのことは、[家長期、林棲期、梵行期の]三種の生涯段階には起こりえない。自らの生涯段階について命ぜられた行為（祭事）を実行しないならば、罪を犯すと聖典に説かれているからである。」

atrocyate brahmasaṁstha iti hi brahmani
parisamāptirananyavyāpārātārūpaṁ
tanniṣṭhatvamabhidhīyate /
tacca trayāṇāmāśramāṇāṁ na saṁbhavati,
svāśramavihitakarmānanuṣṭhāne
pratyavāyāśraṇāt; SBh 3・4・20¹⁵⁾

ここでは、バラモンのあるべき姿、行うべき行為について述べられており、ブラフマンに安立することの意味について語られている。これは、ブラフマンにおける完成、それ以外に関心事のないことを本性とし、それへの専心のことであるとされる。そして、ブラフマンに安立することは、バラモンの家長期、林棲期、梵行期の三種の生涯段階には起こりえないと言う。理由は、自らの生涯段階について命ぜられた行為（祭事）を実行しないならば、罪を犯すと聖典に説かれているからと述べられている。

さらに、SBh では次のように述べられている。

「しかし、遊行者には、一切の行為が放棄されているから、実行しないことによって罪を犯すことは生じない。しかし、寂静（平静を保つこと）・自制（感官の抑制）等は彼ら（遊行者）の特性であるが、[それらは]ブラフマンに安立することの支持であり、[それに]矛盾するものではない。何となれば、ブラフマンに安立することは、まさに寂静と自制に助けられた・自身の生涯段階に命ぜられた・彼の行為である。」

parivrājakasya tu sarvakarmasaṁnyāsāt
pratyavāyo na saṁbhavatyānanuṣṭhāna –
nimittāḥ / śamadamādīstu tadīyo dharmo
brahmasaṁsthatyā upodbalako na virodhī /
brahmaniṣṭhatvam eva hi tasya
śamadamādy upabṛṁhitam svāśramavihitam
karma; SBb 3・4・20¹⁶⁾

ここでは、遊行者は、寂静（平静を保つこと）・自制（感

官の抑制）等の特性を持つので、このこと自体が、ブラフマンに安立することの支持であり、それと矛盾するものではないとされる。

さらに、SBh では次のように述べられている。

「そして、祭礼（犠牲）等は他 [の段階] に [命ぜられた行為] である。そして、その [ブラフマンに安立すること] を逸脱する時、彼に罪が生じる。またかくして、『捨棄 [すなわち遊行生活] 』というはブラフマンなり。何となれば、ブラフマンは最高者なればなり。何となれば、最高者はブラフマンなり。捨棄（遊行）は実にそれらの低き苦行を超越せり』（ナーラーヤナ 78）
yajñādīni cetareṣāṁ, tadyatikrame ca
tasya pratyavāyāḥ / tathā ca ‘nyāsa iti
brahmā brahmā hi paraḥ paro hi brahmā /
tāni vā etānyavarāṇi tapāṁsi nyāsa
evātyarecayat’ (nārā78) SBh 3・4・20¹⁷⁾

ここでは、祭礼（犠牲）等は、遊行者以外の段階に命ぜられた行為であるとされる。そして、そのブラフマンに安立することを逸脱する時、彼に罪が生じるとされる。また、その根拠として、「捨棄 [すなわち遊行生活] 』というはブラフマンなり。何となれば、ブラフマンは最高者なればなり。何となれば、最高者はブラフマンなり。捨棄（遊行）は実にそれらの低き苦行を超越せり」というナーラーヤナの一節が引用されている。

さらに、SBh では次のように述べられている。

「知識と学修と遵法等をもって自己を宣伝せず、虚偽、傲慢等を離脱せるものとなるべきである。あたかも、幼児が、感官未熟性のために、他人に対して自己を顕示しようと願わないのと同じである。何となれば、かようにして、この文章の主要事と補助するものとの意味の接続が妥当となるからである。」

jñānādhyayanadhārmikatvādibhir ātmāna –
mavikhyāpayandambhadarpādirahito bhavet /
yathā bālo’ prarūḍhendriyatayā na pareṣv –
ātmānamāviṣkrartumīhate, tadvat / evaṁ
hyasya vākyaṣya pradhānopakāryarthā –
nugama upapadyate / SBh 3・4・50¹⁸⁾

ここでは、幼児が、感官未熟性のために、他人に対して自己を顕示しようと願わないように、知識と学修と遵法等をもって自己を宣伝せず、虚偽、傲慢等を離脱せるものとなるべきであるとされる。

また、SBh では、聖伝文学を引用し、次のように述べられている。

「またかようにして聖伝文学の作者たちによって、『その者を誰も上流の人とも無学の人とも、博学の人とも善行者とも悪行者とも知らざる者、その者がバラモンなり。眼の見えない人の如くに、おろかな人の如くに、また口のきけない人の如く大地を行くべし。知者は、秘密の法に依拠して、未だ知られざる行いを為すべし。』

また、『特徴を外に顕さず、行為を外に顕さず』等の如くに説かれている。」

tathā cokaṁ smṛtikāriḥ ‘yaṁ na

santaṃ na cāsantaṃ nāśrutaṃ na
bahuśrutam / na suvṛttaṃ na durvṛttaṃ
veda kaścitsa brāhmaṇaḥ // gūḍhadharm –
āśrito vidvānjñātacaritaṃ caret /
andhavajjaḍavaccāpi mūkavacca mahīm
caret' // 'avyaktalingo' vyaktācārah' iti
caivamādi //50// ' SBh 3・4・50^{注19)}

ここでは、バラモンについて、上流の人とも無学の人とも、博学の人とも善行者とも悪行者とも知らざる者であるとされている。また、知者は、秘密の法に依拠して、未だ知られざる行いを為し、また、眼の見えない人の如くに、おろかな人の如くに、また口のきけない人の如く大地を行くべしと述べられている。すなわち、特徴を外に顕さない、行為を外に顕さないことが良いとされる。

小 結

SBh では、ブラフマンに安立することを人生の目的とする僧侶階級であるバラモンのあるべき姿、行うべき行為について述べられている。ブラフマンに安立することとは、ブラフマンにおける完成、それ以外に関心事のないことを本性とし、それへの専心のことでありとされる。

また、遊行者は、寂靜平静を保つこと・自制等の特性を持つので、このこと自体が、ブラフマンに安立することの支持であり、それと矛盾するものではないとされる。祭礼等は、遊行者以外の段階に命ぜられた行為であり、そのブラフマンに安立することを逸脱する時、彼に罪が生じるとされる。「捨棄 [すなわち遊行生活] というのはブラフマンなり。何となれば、ブラフマンは最高者なればなり。何となれば、最高者はブラフマンなり。捨棄 (遊行) は実にそれらの低き苦行を超越せり」という一節が根拠とされている。

さらに、知識と学修と遵法等をもって自己を宣伝せず、虚偽、傲慢等を離脱せるものとなるべきであるとされている。

また、バラモンについて、上流の人とも無学の人とも、博学の人とも善行者とも悪行者とも知らざる者であるとされている。さらに、知者は、秘密の法に依拠して、未だ知られざる行いを為し、また、眼の見えない人の如くに、おろかな人の如くに、また口のきけない人の如く大地を行くべしと述べられている。すなわち、特徴を外に顕さない、行為を外に顕さないことが良いとされる。

3. プラシャスタパーダパーシュヤ (以下 PB) の人間観

プラシャスタパーダの著作である PB には、バラモン (僧侶)、クシャトリア (王族)、ヴァイシャ (庶民) の功德の成就法が説かれている。そこには人間のあるべき姿・人間観を見ることができる。

まず、PB では次のように述べている。

「このうち、共通 [な成就法] は功德に対する信・不殺生・生き物への思いやり・真実を語ること・

盗まぬこと・清浄行・誠実・怒らないこと・灌頂・清浄な供物を捧げること・特定の神への親愛・断食・不放逸である。」

tatra sāmānyāni dharme śraddhā ahimsā
bhūtahitavṛṇṇaṃ satyavacanamasteyaṃ
brahmacaryamanupadhā krodhavarjanam
abhiṣecanām śucidravayasevanam
viśiṣṭadevatābhaktirūpavāso' pramādaśca /^{注20)}

ここでは、全ての人々に共通な、功德を成就する方法として、功德に対する信、不殺生、生き物への思いやり、真実を語ること、盗まぬこと、清浄行、誠実、怒らないこと、灌頂、清浄な供物を捧げること、特定の神への親愛、断食、不放逸が挙げられている。

さらに、バラモン (僧侶)、クシャトリア (王族)、ヴァイシャ (庶民) の成就法とバラモン特有な功德の成就法について述べられている。

「バラモン (僧侶)、クシャトリア (王族)、ヴァイシャ (庶民) にとって、祭祀・ヴェーダの学習・布施が [成就法である]。バラモンに特有の [成就法] は報酬を受けること・ヴェーダを教えること・犠牲祭の実行および自己の階級に規定された浄化祭である。」

brāhmaṇakṣatriyavaiśyānām
ijyādhyayanadānāni brāhmaṇasya
viśiṣṭāni pratigrahādhyāpanayājānāni
svavarṇavihitāśca saṃskārāḥ /^{注21)}

ここでは、バラモン (僧侶)、クシャトリア (王族)、ヴァイシャ (庶民) にとっての成就法として、祭祀、ヴェーダの学習、布施が挙げられている。また、バラモンに特有の成就法として、報酬を受けること、ヴェーダを教えること、犠牲祭の実行および自己の階級に規定された浄化祭を行うことが挙げられている。

次に、クシャトリア (王族) の成就法について述べられている。

「クシャトリア (王族) には正しく人民を守ること・悪人を罰すること・戦において怯まないこと及び自己に属する浄化祭が [成就法である].」

kṣatriyasya samyakprajāpālanamasādhu –
nigraho yuddheṣvanivartanam svakīyāśca
saṃskārāḥ /^{注22)}

ここでは、クシャトリア (王族) の成就法として、正しく人民を守ること、悪人を罰すること、戦において怯まないこと及び自己に属する浄化祭を行うことが挙げられている。

さらに、庶民と奴隷民の成就法が述べられている。

「庶民には売買・農業・家畜の保護および自己に属する浄化祭が [成就法である]。奴隷民には前の [三] 階級への従属・マントラを唱えない儀式が [成就法である].」

vaiśyasya krayavikrayakṛṣipāśupālanāni
svakīyāśca saṃskārāḥ / śūdrasya pūrva –
varṇapāratantryamamantrikāśca kriyāḥ /^{注23)}

ここでは、庶民の成就法として、売買、農業、家畜の保護および自己に属する浄化祭を行うことが挙げられている。また、奴隷民の成就法として、バラモン、クシャトリア (王族)、庶民への従属とマントラを唱

えない儀式が挙げられている。

小 結

まず、功德を成就する方法の中でも、全ての人々に共通なものとして、功德に対する信、不殺生、生き物への思いやり、真実を語ること、盗まぬこと、清浄行、誠実、怒らないこと、灌頂、清浄な供物を捧げること、特定の神への親愛、断食、不放逸が挙げられている。そして、バラモン、クシャトリア(王族)、ヴァイシャ(庶民)にとっての成就法として、祭祀、ヴェーダの学習、布施が、また、バラモンに特有の成就法として、報酬を受けること、ヴェーダを教えること、犠牲祭の実行および自己の階級に規定された浄化祭を行うことが挙げられている。

さらに、クシャトリア(王族)の成就法として、正しく人民を守ること、悪人を罰すること、戦において怯まないこと及び自己に属する浄化祭を行うことが挙げられ、ヴァイシャ(庶民)の成就法としては、売買、農業、家畜の保護および自己に属する浄化祭を行うことが挙げられている。また、奴隷民の成就法として、バラモン、クシャトリア(王族)、ヴァイシャ(庶民)への従属とマントラを唱えない儀式が挙げられている。この中で、共通な功德の成就法の中に、PBの人間観を見て取ることができる。

結 論

ここでは、CSの人間観、医者観をBShのバラモン観やPBの功德の成就法に見られる人間観と比較考察していく。まず、CSでは、幸福な人生と不幸な人生、有益な人生と無益な人生について述べられている。すなわち、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若々しさを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚機能の対象に対して大きな力をもって生活している人等に、幸福な人生があると、これと正反対の人に不幸な人生があるとす。

また、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務、財、愛からなる人生の三つの目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人の人生が有益であり、これと反対の人々の人生は無益であるとする。

BShにおいても、ブラフマンに安立することを最高の目的とするバラモンにとって、CSにある、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心

の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人というような項目は、彼らの目的を達成する為にも有効なものであると考えられる。

また、PBにおける功德を成就する方法の中でも、全ての人々に共通なものとして、功德に対する信、不殺生、生き物への思いやり、真実を語ること、盗まぬこと、清浄行、誠実、怒らないこと、不放逸が挙げられており、CSの幸福な人生と有益な人生についての言及と類似しているところがある。

また、CSでは、アーユルヴェーダを学ぶ目的を、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシャは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためであるという。これらの三カーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる。

ここで、バラモンがアーユルヴェーダを学ぶ目的は、一切衆生を救済するためであり、また、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされている。これは、BShのバラモンの目的達成にも有効なものであると考えられる。また、PBではバラモン、クシャトリア(王族)、庶民にとっての成就法として、祭祀、ヴェーダの学習、布施があげられており、三カーストについて論じている点や、成就に必要なものとしてヴェーダの学習を挙げている点も、CSの言及と類似しているところがある。

さらに、CSでは良い医者についての言及が見られる。すなわち、良い医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とする。また、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであると言われる。あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れのない知恵に基づいていると言われる。

SBhには医者についての言及はないが、我欲を捨て、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とすることや、あらゆる幸福は汚れのない知恵に基づいているとすることは、バラモンのあるべき姿に矛盾しない。同じくPBにも医者についての言及はないが、不殺生、生き物への思いやり、真実を語ること、盗まぬこと、誠実、怒らないこと、不放逸が、成就法として挙げられており、そこに流れている人間観に矛盾はない。

以上の考察から、世俗的な医学論書であるCSの中にも、SBhのような聖典解釈の宗教哲学論書やPBのような多元論哲学論書と同じような人間観を垣間見ることができる。

摘 要

世俗的な医学論書であるCSの中にも、布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人にこそ幸福な人生があるというような、聖典解釈の宗教哲学論書であるSBhや多元論哲学論書であるPBにも、同じような人間観を垣間見ることができる。しかし、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は、最も医者らしい人として尊敬されるべきであるといった良い医者についての言及や、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものでありといった悪い医者についての言及は、医学論書であるCSにふさわしいものである。

注 記

- 1) Carakasamhitā (以下CS) ed. by V.Bh.Sharma, Chowkhamba, Sanskrit Studies, Varanasi 1988.VOL. XCIV.Vol. I . p.598.,11.19-20. 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期)昭和63年 朝日出版 p.232参照.
- 2) CS. Vol. I. p.598,11.4-7 矢野上掲書 p.232参照.
- 3) CS. Vol. I. p.599,11.23-27 矢野上掲書 p.232参照.
- 4) CS. Vol. I. p.599,11.27-31 矢野上掲書 p.232参照.
- 5) CS. Vol. I. p.603,11.29 矢野上掲書 p.234参照.
- 6) CS. Vol. I. p.603,11.29-33 矢野上掲書 p.234参照.
- 7) CS. Vol. I. p.603,11.33-36 矢野上掲書 pp.234-
- 8) CS. Vol. I. p.615,11.21-24 矢野上掲書 p.239参照.
- 9) CS. Vol. I. p.615,11.25-26., p.616,11.7-8 矢野上掲書 p.239参照.
- 10) CS. Vol. I. p.616,11.9-12 矢野上掲書 p.239参照.
- 11) CS. Vol. I. p.616,11.13-16 矢野上掲書 p.239参照.
- 12) CS. Vol. I. p.616,11.17-20 矢野上掲書 p.239参照.
- 13) CS. Vol. I. p.617,11.17-20 矢野上掲書 p.239参照.
- 14) CS. Vol. I. p.617,11.31-32 矢野上掲書 p.239参照.
- 15) Brahmasūtra Śankarabhāṣya (以下SBh) ed. K.L.Joshi, place year: Parimal Sanskrit Series No.1. Vol.II. p.884.11.4-6 金倉圓照『シャンカラの哲学』下昭59年 春秋社 p.426参照.
- 16) SBh Vol.II. p.884.11.6-8 金倉上掲書 p.426参照.
- 17) SBh Vol.II. p.884.11.8-10 金倉上掲書 p.426参照.
- 18) SBh Vol.II. p.923.11.3-5 金倉上掲書 p.466参照.
- 19) SBh Vol.II. p.923.11.5-8 金倉上掲書 p.467参照.
- 20) The Praśastapādabhāṣya (以下PB) with commentary Nyayakandali of Sridhara ed. by V.P.Dvivedin Delhi,1984 p.272.11.13-16 宮元啓一『インドの「多元論哲学」を読む』2008年 春秋社 p.161参照.
- 21) PB. p.272.11.16-18 宮元上掲書 p.161参照.
- 22) PB. p.272.11.18-19 宮元上掲書 p.161参照.
- 23) PB. p.272.11.19-20 宮元上掲書 p.161参照.